

平成24年度

大正大学大学院学術研究助成  
成果報告書

## 大正大学大学院学術研究助成一覧

(個人研究)

<継続>

青年の自己確立 ——日本のアイデンティティの理論的構築——

研究代表者 柴田 康 順

指導教授 森岡由起子

<新規>

『唯識三十頌』の註釈書において護法説と安慧説とを比較研究

研究代表者 金 範 松

指導教授 廣澤隆之

研究課題	青年の自己確立 ——日本のアイデンティティの理論的構築——
研究代表者	柴田 康順 (人間学研究科福祉・臨床心理学専攻博士後期課程)

## 1. 研究目的

Erikson (1959) が提唱したアイデンティティ理論を、そのままの形で現代の日本人青年の自己確立の問題に援用することは、日本人の心性を理解する上ではあまり適切ではないと考えられる。現代の日本人青年が抱える問題やこれまでの自己形成の過程を多面的に捉えることで、より適した自己確立理論を構築することが求められる。そして、日本人の心性がよりの確に反映された自己確立理論を構築することで、現代の日本人青年についての理解が深まるのではないかと考えられる。その結果、現代の青年が直面している職業選択などの問題をはじめ、様々な心理臨床的な問題を理解するための理論的枠組となることが期待される。

本研究では、日本の青年の姿を反映させた自己確立の理論的枠組みの基礎を構築することを目的とする。本研究で目的とする自己確立理論は、Allport (1937) のパーソナリティ階層的組織の図式のように、個人の自己の個性を統合する試みであり、このような研究は最近では大倉 (2002, 2011) のほかにほとんど見られない。また、白井ら (2010) は近年の青年心理学におけるアイデンティティ研究に鑑み、個性を重視したナラティブモデルと類型論としてのステイタスモデルを統合する必要性について述べている。そこで本研究では、青年の①父子関係、②母子関係、③きょうだい関係、④同性の友人関係、⑤異性の友人関係という、対象関係や自己感・他者感などを含めた5つの側面から多面的に把握する部分と、臨床例として⑥ひきこもりの自己確立の過程を考察する部分という構成で行う。一般青年と臨床群の青年との比較によって、本研究で構築された理論モデルが現実に問題を抱え

た青年にどの程度適合するののかということにも言及することで、青年への現実的な援助の視点も含まれる。

アイデンティティの状態は、面接法や質問紙法を用いて測定されることが多い。無藤（1979）は Marcia（1966）の考案したアイデンティティ・ステータス面接を日本人に適した形に修正した。しかし、青年期のアイデンティティは乳児期から現時点までのすべての発達課題の統合であると考えられるため、アイデンティティ・ステータス面接ではアイデンティティを把握するには不十分と考えられる。

また宗田・岡本（2006）はアイデンティティを「個」と「関係性」の面から捉え直し、質問紙作成を試みている。「個」としてのアイデンティティは従来の質問紙で測定できるように思われる一方で、「関係性」としてのアイデンティティは日本的な「場」の意識を反映させたような側面であることが興味深い。妥当性、信頼性ともに十分に兼ね備えているとは言えない状態である。

以上の点から、アイデンティティを面接法や質問紙法などを用いた調査研究によって探索的に捉えようとするのは非常に困難である。そのため、従来の研究はアイデンティティ理論の一部を援用して、別の概念との関連を調べるといった仮説検証型のものが多く行われてきた。しかし、日本的なアイデンティティとは、西洋的な自己を反映した「個」としてのアイデンティティより、日本的な「場」の意識を反映した「関係性」としてのアイデンティティに、より重点を置いたものであると考えられるため、Erikson の理論をそのまま援用した測定方法を用いるだけでは不十分であると思われる。ところで、Franz & White（1985）は幼児前期の関係性の課題である対象および自己の恒常性を査定するために TAT は有用であると述べている。また、TAT 以外にも個人のパーソナリティを測定するために投射法を用いることで、面接法や質問紙法では把握することが困難な個人の無意識的な部分にも迫ることが可能となると思われる。これまでに質問紙法、面接法、投射法を併用して、アイデンティティに関して総合的に調査した研究はほとんど見られない。そこで、本研究ではこれらの測定法を併用した縦断研究を行い、青年の自己確立の様相と経緯を把握していく。

## 2. 研究方法

### (1)一般青年への調査研究

**調査協力者** 縦断的な調査研究という形式を採用することから、調査者（筆者）と調査協力者の関係性が質的に変容するという事態は避けられない。そこで、調査者と調査協力者の関係性の変容による影響を最小限に抑えるために縁故法によって調査協力者の選定を行い、青年 10 名に対し 5 回の縦断調査を実施した。調査対象者の調査開始時点での平均年齢は  $23.20 \pm 2.39$  歳であった。

### 調査内容と方法

#### ①父子関係②母子関係に関する調査

**調査期間** 2010 年 10 ～ 11 月

**調査内容** i) 半構造化面接 幼少期からの父子関係、母子関係についてそれぞれ尋ね、青年の中で父親像、母親像がどのように内在化してきたのかを調べた。また、両親の関係が青年に与える影響についても尋ねた。ii) 質問紙調査 同一性地位判別尺度(加藤, 1983)、GHQ-28 iii) 投映法調査 ハーバード版 TAT12 枚 (男女共通: 図版 1, 2, 3BM, 4, 5, 8BM, 13MF, 19, 16 男性のみ: 6BM, 7BM, 9BM 女性のみ: 6GF, 7GF, 9GF) iv) 非構造面接 「ここ 1 年以内で経験した転機」について尋ねた。

#### ③きょうだい関係に関する調査

**調査期間** 2011 年 2 ～ 5 月

**調査内容** i) 半構造化面接 幼少期からのきょうだい関係について複数いる場合は一人ずつについてそれぞれ尋ね、きょうだいからどのような影響を受けてきたのかを調べた。また、関係体としてのきょうだいの中で自分をどのように位置づけてきたのかという点についても尋ねた。ii) 質問紙調査 同一性地位判別尺度、日本語版 PBI (北村ら, 1993) iii) 投映法調査 風景構成法 (中井, 1969)、家族イメージ法 (亀口, 1988)、動的家族画 (Burns et al, 1972) iv) 非構造面接 「家族の中での自分」「『自分』を構成する要素」について尋ねた。

#### ④同性の友人関係に関する調査

調査期間 2011年6～7月

調査内容 i) 半構造化面接 幼少期からの同性の友人関係について尋ね、関係の質的变化について調べた。また、同性の友人の中でも特に親しい友人について尋ね、親密性と関連する要因について調べた。ii) 質問紙調査 同一性地位判別尺度、友人関係測定尺度(吉岡, 2001) iii) 投映法調査 精研式 SCT、バウムテスト(Koch, 1949) iv) 非構造化面接 「自分」について自由に語るよう求めた。

#### ⑤異性の友人関係に関する調査

調査期間 2011年12月～2012年3月

調査内容 i) 半構造化面接 幼少期からの異性の友人関係について尋ね、関係の質的变化について、同性の友人関係と比較しながら尋ねた。また、異性の友人関係の中でも特に親しい友人について尋ね、親密性と関連する要因について、同性の親友と比較しながら尋ねた。さらに、恋愛関係について回想的に尋ね、他の人間関係と比較しながら語るよう求めた。ii) 質問紙調査 同一性地位判別尺度、友人関係測定尺度 iii) 投映法調査 ハーバード版 TAT13 枚(①父子関係②母子関係に関する調査で用いたセットに図版 10 を追加) iv) 非構造化面接 「自分」について自由に語るよう求めた。

#### (2)臨床群の青年への調査研究

調査協力者 A 県の NPO 法人が運営するひきこもり青年のフリースペースを利用している青年 3 名に調査協力の依頼をした。そのうちの 1 名に対しては 3 年間にわたり 3 度の縦断調査を実施した。

調査期間 2011年2月～3月、2012年1月、2013年2月

調査内容 i) 投映法調査 家族イメージ法、風景構成法 ii) 質問紙調査 同一性地位判別尺度、ラスムッセン自我同一性尺度(宮下, 1978)、日本語版 PBI iii) 半構造化面接 過去のひきこもり体験について、その経緯を語るよう求めた。2 回目以降の調査では前回からの変化について尋ねた。

### 3. 研究成果と公表

アイデンティティに関する研究はこれまでに非常に多くなされているため、新たな知見を提示することは現時点では困難である。このことはアイデンティティの概念自体が研究者によって様々に定義されている状態に起因していると思われるため、各領域についての調査結果を統合する必要がある。そのため、個々の調査協力者のデータをナラティブに解釈し直し、各領域についての調査結果を個別のストーリーの中で位置づけるという作業を行う予定である。

研究結果については随時国内外の学会において発表を行っている。一般青年についての研究発表は国内学会で行っており、2011年に日本青年心理学会第19回大会において『青年における友人関係の希薄さと職業決定困難との関連』を発表し、同性の友人関係が希薄な青年は対人的な信頼感の欠如を基底としているため、関係性は不確実なものとしてしか認識されず、主体的に対象とかかわれないため、結果としてアイデンティティ達成の指標となる職業選択を逡巡すると述べた。2012年には日本教育心理学会第54回総会において『青年期の友人関係と自己確立』を発表し、同性の友人関係と時間的展望についての関連に言及し、アイデンティティの状態への影響について述べた。臨床群の青年についての研究発表は国内学会では2012年に日本児童青年精神医学会第53回総会において『ひきこもり青年の心理的側面の検討』、国際学会では2011年に第8回国際青年期精神医学会において『The psychological aspect of social-withdrawal in adolescence and the possible supports from the viewpoint of clinical psychology』、2012年に第20回国際児童青年精神医学会において『Psychological aspect of social-withdrawal in adolescence in Japan -Family relations and the sequential psychological changes』を発表した。これらの研究発表ではひきこもり心性について調べ、ひきこもり当時の家族関係やサポート機関の意義などを踏まえ、ひきこもり青年に対して可能な援助について考察した。特に国際学会では日本的なひきこもりについての研究発表は大きな関心を得ており、雑誌論文の投稿を要請されている。2013年度は一般青年についての研究発表を日本人間性心理学

会第 32 回大会で行い、臨床群についての研究発表を第 15 回ヨーロッパ児童青年精神医学会と日本児童青年精神医学会第 54 回総会で行う予定である。

## 参考文献

- Allport GW, 1937, *Personality-A psychological interpretation*, New York: Henry Holt. (詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子ら (訳), 1982, パーソナリティ—心理学的解釈, 新曜社)
- Erikson EH, 1959, *Identity and the life cycle*, New York: WW Norton. (小此木啓吾 (訳編), 1973, 自我同一性, 誠信書房)
- Franz, C. E. & White, K. M., 1985, *Individuation and attachment in personality development : Extending Erikson's theory*. *Journal of Personality*, 53, 224-256
- Marcia, J. E., 1966, *Development and validation of Ego-Identity status.*, *Journal of Personal and Social Psychology.*, 3, 551-558
- 無藤清子, 1979, 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, *教育心理学研究*, 27 (3), 178-187
- 大倉得史, 2002, 拡散——アイデンティティをめぐり、僕たちは今, ミネルヴァ書房
- 大倉得史, 2011, 「語り合い」のアイデンティティ心理学, 京都大学学術出版会
- 白井利明・尾崎仁美・徳田治子ら, 2010, 自己の同一性はどのように作られるのか——人生構築理論の提唱, *日本心理学界*第 74 回大会発表論文集
- 宗田直子・岡本祐子, 2006, 「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究の動向と展望——発達早期における「個」と「関係性」の起源に着目して——, *広島大学心理学研究*, 6, 223-242



研究課題	『唯識三十頌』の註釈書において 護法説と安慧説とを比較研究
研究代表者	金 範松 (仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻三年)

## 1. 研究目的

本研究は、唯識思想において最も重要な Triṃśikāvijñaptikārikā (『唯識三十頌』) に対する註釈書の比較研究を目的とする。

その註釈は十大論師たちによって行われたが、今はほとんど残っていない。現在するもののうち、『成唯識論』は護法説を正義として玄奘によって編訳されたものである。しかし、膨大な論のうち、何処までが護法説であるかは疑わしいことなどもある。一方、Sylvain Levi によって発刊された安慧の梵文註釈 (Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya : Tvbh) は中国唯識以前のインド唯識思想の展開において重要なものであり、唯識思想史解明にとって無視することができない重要なものである。

何れにせよ、それらは同じ『唯識三十頌』に対する註釈である。『唯識三十頌』をより正しく深く理解する為には、それら護法と安慧の注釈内容の比較分析が欠かせない。

このような視点から、筆者は安慧と護法の説を比較分析して、論師たちが如何に『唯識三十頌』を理解していたか、または論の意図 (目的)・観点について如何なる論理構造をもっていたかを比較分析したいと考える。

## 2. 研究方法

本研究は Triṃśikāvijñaptikārikā (『唯識三十頌』) の全体の構造の中で、二論師の論理体系を比較分析する方法を採る。それは単なる概念の比較分析ではなく、論の意図や観点に基づいた論理の一貫性の中で、二論師の論理的

展開の理解を求めることである。

まず、注釈書に関しては、安慧の Tvbh を中心に読みながら、それに当たる部分を『成唯識論』の中で護法説を中心に取出して比較分析する。また、『成唯識論』では唯識思想を総合的にまとめる議論が論理的に整理されていることから、論理の展開として必要な部分は取り扱うことにする。

また、テキストに関しては、Tvbh (Based on the edition by Hartmut Buescher: *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya, Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien 2007) と『成唯識論』(新導『成唯識論』、法隆寺、1972) とを底本とした。

Triṃśikāvijñaptikārikā は分量としては短いものの、その内容は唯識思想全体に係るので、本研究の成果としては、論議の中心になるガイドラインのみを公表する。

### 3. 研究成果と公表

#### (1) 論の趣旨 (目的)

Tvbh の最初には注釈を作す趣旨が三つ示されている。それは『成唯識論』でもほぼ同じ内容として説明されている。その内容を要約すると以下のようである。

安慧：Sthiramati

「煩惱・所知障を断じ、解脱（煩惱障の滅）・一切智者（煩惱障・所知障の滅）に達する（果を得る）」

護法：dharmapāla

「諸の邪執（境有・識世俗有）を破る（唯識の理を顕す）ことを明かす」

九

#### (2) 我・法の所依は何か？：頌一

「若し識のみ有るなら世間・及び諸聖教に説く我・法の根拠は何故か」の問題について二人の見解が別れる。それは識転変説において、一分・または

三分（四分）として知られている。

安慧：Sthiramati

「識轉變（vijñānapariṇāma）によって我・法の仮説ある。轉變とは、異なること（anyathātva）で、阿頼耶識から我・法に似現（nirbhāsa）する妄分別が生ずる」

護法：dharmapāla

「仮（識所変）によって我・法あり。変とは、識体（自証分）は〔依他二分に〕轉變して〔遍計〕二分（相・見）に似る。相・見（依他二分）俱に自証に依って起るが故に」

轉變識と識所変という概念は、一頌以後から三十頌までの論理の展開を分析するうえでも、また二人の思想を比較するうえでも根本的な拠り所になる。

(3)三能変における相違の例：頌二～十四

①異熟（阿頼耶識）の範囲

安慧：Sthiramati

轉變識の主体として根本識（一分）のみを異熟（阿頼耶識）の範囲として設定する。

「善・悪業の習気が成熟して活動可能になることによって、生成して行く果報である」

そしてその阿頼耶識の転向の果を得る修行の階位を阿羅漢（十地）と示す。

護法：dharmapāla

根本識について所変の三つの様相（自相・果相・因相）をもって説明する。そのうち、自相（多く異熟性：七地以前の異熟）を転向の主体として設定する。即ち、八地以上を阿羅漢と為す。さらに、阿頼耶識の衆名を挙げて第八根本識を修行の階位、有漏・無漏などの分別をもって理を明かす。

## ②思量（末那識）

安慧：Sthiramati

思量（末那識）を染汚性としてのみ認識する。さらに、末那識の止滅によって阿羅漢位を得る。故に、末那識の止滅は十地になる。

護法：dharmapāla

思量（末那識）を未転依（有漏位）・已転依（無漏位）に分けて説明する。それは阿羅漢位（八地）に末那識が止滅するなら、八地以上の異熟識と俱なる識が無くなることになる。それは阿頼耶識と末那識は恒に俱に存在するという理に違うことになる。即ち、八地以上で末那識は無漏として存在すべきであることが護法の理である。

さらに、『成唯識論』では末那識の煩惱・所知に関する論が行われている。即ち、安慧は唯煩惱障のみと俱なると論ずるのに対して、護法は煩惱・所知ともに俱なることを論証する。

## （４）現行の分位：頌十五～十六

安慧：Sthiramati

頌十五・十六は根本識（阿陀那識）と前六識との現行の分位を現すところであるが、頌にも Sthiramati の注釈にも第七末那識については言及しない。それは、Sthiramati の一分の立場においては根本識（阿陀那識）と第七末那識（染汚）とを区別する必要はないからかもしれない。それは、根本・染汚いずれも阿羅漢（十地）位を得るまでは恒にお互いに存在するからでもあろう。

護法：dharmapāla

しかし、護法は根本識の行相を種子と現行とに分けて末那識は第八根本識（種子・現行）を所依としながらも、所縁（対象）とするのは見分（現行識所変の見分）のみという。即ち末那識（未転依）は識所変（三分）においてのみ存在し、已転依（八地以上）には一切法を所縁とするという。

さらに、『成唯識論』では三能変の分別を為す。即ち、八識の現行の分位と能変（心・意・識）の一・異関係を論ずる。

(5) 唯識所変の論証：頌十七～二十四

頌十七は、我・法の所依は何かに対する二人の立宗を成立させる。

安慧：Sthiramati

識転変（妄分別：有） — 所分別の我・法（無）

～識転変は依他起であり、所分別は遍計所執である。

護法：dharmapāla

諸識 —  $\left[ \begin{array}{c} \text{分別（見分）} \\ \text{（有）} \\ \text{所分別（相分）} \end{array} \right] — \text{能取・所取相應の我・法（無）}$

～諸識の所変である見分・相分は依他起（安慧：遍計）であり、能取・所取相應の我・法は遍計である。

(6) 唯識の性（真如）：頌二十五

安慧：Sthiramati

真如（唯識性）は、無所得の界を証触（spr̥ṣate）すること、一切の障を解脱した自在位を得ること、即ち現觀（abhisamaya）である。

護法：dharmapāla

真如（唯識性）は、諸法の勝義（勝義の勝義）として、円成の勝義無性である。しかし、無性という言葉は、極めて了義に非ず（理を離れる性）を顕す。諸の有智の者は之に依って総じて諸法は都て自性無と撥すべからずという。その点に関して、唯識の性に二種有る、一つは虚妄（遍計所執）、二つは真実（円成実性）である。さらにまた、二性（実体）ある、一つは世俗（依他起（相）、二つは勝義（円成実性）である。

(7)見道（通達位）：頌二十八

安慧：Sthiramati

二取無し、即ち、**識轉變（妄分別：有）**

護法：dharmapāla

見分あり・相分無し、即ち、**諸識 — 分別（見分）**

さらに、見道の真・相を差別する。即ち、真見道は無分別智であり、相見道は後得智である。前の真見道は唯識の性（安慧・護法）を証し、後の相見道は唯識の相（護法）を証する。真・相二の中に、初（真）勝れるが故に頌に遍く説ける。前の真見道は根本智（無相）であり、後の相見道は後得智（有相）である。

(8)転依：頌二十九・三十

安慧：Sthiramati

所依の転は、「異熟（阿頼耶）識（依他起：染・浄法の所依）」を転ずることである。

護法：dharmapāla

転依は、生死・涅槃の所依である「唯識の真如」である。頌の意は、ただ唯識実性を転ずることのみを顕す（所転得）という。

転依の意に別して四種あり、修習位の所得の転依は究竟位の相である。即ち、解脱身には莊嚴が無い、莊嚴あるものが法身（五法：真如・四智）である。浄法界のみを独り法身と名づくには非ず。

(9)まとめ

以上、Triṃśikāvijñaptikārikā（『唯識三十頌』）の註釈書において Sthiramati 説と護法説との比較をしてみた。それは同じ『唯識三十頌』を読んだ二人においても、まさに「唯識」という言葉が示すように、自分の感受

(理解)・意図によって解釈したことが分かる。さらに、ある人がその頌・注釈を読んだとしても、また様々の理解(解釈)が生み出されるであろう。

しかも、二人の注釈には、論の最初に示した論の趣旨、または唯識の立宗を成立させる二つの論理(転変識・識所変)に基づいて、論証が最後まで一貫性をもって進んだことが分かる。それは論の全体に関わっている一つの構造(一分・三分)である。さらに、その構造の間には末那識(意)の問題があることが浮かび上がってきた。筆者は、以前にも末那識に関しては研究したことがある。しかし、自分の論理を論証するには限界があった。それは全体の構造が把握できなかったことが、今回の研究によって明らかになった。これは筆者において大きな成果であり、それによって今後の課題や研究方向が見えてきた。

また、『唯識三十頌』はこの二人の論師によって唯識への証得、さらにその証得を言葉で飾る(莊嚴)というメッセージが伝えられている。二人においても唯識への証得は大前提であり、さらに護法は、唯識への証得を論理(瑜伽)に基づいて飾ることが菩薩(大乘)の使命であることを強く伝えていると感じられる。証得(悟り)ということも主観(唯識)であるが、研究者の立場で言えば、論理の一貫性・全体を貫く視線といえよう。それを攔めるまでは繰り返し繰り返し読むべきであることが本研究を通じて改めて実感された。さらに、それは現代の我々の仏教学の方法論としても重要な意味があると思う。即ち、隔離された研究、または概念にこだわる研究など、同じ内容・概念でも総合的に結ぶことができないことが現在の仏教学の現実であるとの感は抜き得ない。それを打ち破るべく今後の研究を進めて行きたいと考える。